

中国明代までの症状と脈状

中川 俊之

日本鍼灸研究会

中国伝統医学における脈を考える時、私たちは脈をいくつかの項目に分けることが出来る。脈を診る部位と、平脈(常脈)、病脈、死脈などである。

平脈は、部位(寸尺)をはじめ、季節、肥瘦、老若、男女に相応しい脈状などを指す。病脈は、浮沈遅数などの脈状を指す。死脈は、七死脈のように死脈として定義される脈状の他に、損至や動止、また、症状と脈状との関係で生死(予後)が決定される記載を見ることが出来る。

今回発表では、症状と脈状の関係について考察してみたいと思う。実際に脈診を行う場合、得られた脈状がその人にとってどのような意味を持つか、すなわち予後を知る必要があるからである。

明代の『瀕湖脈学』までの医書に見える記載を材料に、症状と脈状との関係から生死(予後)を決定する構造を分析した。

症状と脈状との関係について記載する早期の医書として、先ず『難経』十七難を挙げる事が出来る。五歳の相克を骨子として展開されている。

「病若閉目不欲見人者。脈当得肝脈強急而長。而反得肺脈浮短而濇者死也」

「病若開目而渴心下牢者。脈当得緊実而数。反得沈濡而微者死也」

「病若吐血復衄血者。脈当沈細而反浮大而牢者死也」

「病若譫言妄語身当有熱。脈当洪大而手足厥逆。脈沈細而微者死也」

「病若大腹而洩者。脈当得微細而濇。反緊大而滑者死也」

(『難経』十七難)

しかし、後代の記載のルーツは『脈経』巻第四の診百病生死決第七と同じく巻第四の診三部脈虚実決生死第八、特に診百病生死決第七はその多くが後代の医書に引用されている。前者には症状と脈状との記載が70条見え、後者には26条見える。

「診傷寒熱盛脈浮大者生。沈小者死」

「傷寒已得汗。脈沈小者生。浮大者死」(『脈経』巻第四の診百病生死決第七)

「三部脈大而数。長病得之生。卒病得之死」

(『脈経』巻第四・診三部脈虚実決生死第八)

『脈訣』(六朝期成立とされる)の診雜病生死歌には31条の記載が見え、『脈粹』(1066年)の審定雜病吉凶脈法には67条が見える。『察病指南』(1241年)の審諸病生死脈法は分類が細かく、傷寒類4条、瘧病類4条、熱病類9条、水病類2条、洩瀉類5条、下痢類3条、腸澼類5条、咳嗽類5条、上気類5条、癲狂類3条、霍乱類1条、頭目類5条、心腹類5条、汗類3条、血類5条、金瘡類2条、墜壓類1条、中毒類5条、雜病類15条の計87条の記載が見える。

『診家枢要』(1359年)の諸脈宜忌類に33条、驗諸死證類に22条見える。

『瀕湖脈学』(1564年)の四言挙要には30条近くの記載が有る。

『脈粹』の審定雜病吉凶脈法、『察病指南』の審諸病生死脈法、『診家枢要』の諸脈宜忌類、驗諸死證類は、『脈経』の記載を踏襲もしくはその影響を受けたものであるが、『脈訣』の診雜病生死歌は『脈経』をはじめとする他医書の記載と大きく内容を異にしている。